

Title	<研究ノート>参与・行動・観察：中国帰国者のフィールドワークから
Author(s)	鍛冶, 致
Citation	教育・社会・文化：研究紀要 = Socio-Cultural Studies of Education (2002), 8: 25-37
Issue Date	2002-07-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/187230">http://hdl.handle.net/2433/187230</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 参 与 ・ 行 動 ・ 観 察

—中国帰国者のフィールドワークから—

鍛 治 致

Participation, Action, Research

— Doing a Fieldwork of Chugokukikokusha —

Itaru KAJI

## 1

エスノグラフィーではフィールドワーカー自身が測定機器でありフィールドワークが出典である。ただし、この測定機器は機械のように標準化されていない生身の人間。この出典はその現場に居合わせた者だけが体験できた一過性の出来事の集合。そこがちょっとややこしい。つまり民族誌では「測定機器なんか皆同じ。いちいち仕様説明しなくてよろしい」「出典はこの本。図書館や書店に行けば誰でも読めますよ」という具合に立証任務を他に委託することは不可能なのだ。だから自分が見聞きした事象を読み手に「正確」に伝えようとしたとき調査者はまず自分自身について、次に自分と被調査者との関係についてあれこれ言及するはめになる。これは相当にしんどい作業だ。

だが一方、誰がどう調査したのかが見えてくる民族誌は読んで楽しい。「こういう人がこう言うんだから実際はもっとうだ」とか「調査過程から推察するに本当はもっとう書きたかったんだけど諸般の事情でそう書けなかったのだろう」等々、どこをどう補って（差し引いて）読むべきかをめぐり、書き手との間に様々な駆け引きができるようになるからだ。参与観察の過程や調査者自身について（読み手を退屈させたり自分が大切にしたい人々に迷惑が及ばない範囲で）報告することは、その民族誌の権威を低めることはあっても価値を低めることはないだろう。

実際、数ある学問分野の中で、近年フィールドワーカーほど自分を語り研究の裏舞台を開示することを強く求められるようになった業種は他にない。「〇カ年にわたるフィールドワークによれば」とか「△年〇月×日のフィールドノーツによると」とだけ言っておけば（とりあえずは）よかった気楽な時代はとうの昔に終わっている。フィールドワーカーは何よりもまず、自分という人間の（そして自らの作品の）「正しさ」を主張するために一人称で語ら

ねばならなかったのだ。

以下に私が発表する文章も以上のような動機の延長線上に位置している。私はここで、抽象的な「フィールドワーク論」を展開することよりも、具体的なエピソードを中心に「私という人間」および「私と彼（女）らとの関係」が形成されていった過程を紹介することに努めた。本稿は研究業績そのものというよりは、私がこれまでに発表してきた（そして今後発表するであろう）研究業績の副読資料として位置づけられることを意図して書かれている。本稿が「研究論文」でなく「研究ノート」となっているのもそのためである。

## 2

私は1968年に山形で生まれ、生後すぐに東京に連れて行かれた。2人の祖父と1人父の中には警官・米屋・鍛冶屋が1人ずつ。両親ともに高卒。1979年までは東京、1995年までは埼玉、現在は大阪に住んでいる。

私が中国留学を決意したのは1986年ごろ。当時私はオハイオ州の田舎で1年間ホームステイしていたが、米国メディアの反共姿勢には驚いた。そこで「社会主義国が本当にそんなに悪いところなのか。いっぺん住んでみなければ」と思った。また、自分が米国人に対して「日本のもの」として紹介していた漢字や緑茶や箸や書道や豆腐や醤油が実は中国からのパクリらしいということも分かってきた。そこで「大学生になったら中華人民共和国に留学しよう」と決意した。

帰国後は東京外大日本語科に進学して日本語教育を専攻した。これは「世界中をぶらぶらしてても食っていけるよう手に職を」と思ったからだ。

「日本と中国の異同を見極めたい」「西洋と出会うまで日本が模範としていた国へ」そんな気持ちのある年下の中国留学経験者に打ち明けたところ「それなら日本と最も関係が深い中国東北に行くように」と勧められた。また、折角だから自分の専攻と関係があるところだと思い、日本語教育が盛んな吉林大学に留学した。

文部省の公費留学だったので学費と寮費は免除。留学生は多い順に日本人・朝鮮人・ロシア人・韓国人。夜中は1時間の時差でNHKラジオが受信できた。日本は地球の裏側にある遠い国々とばかり仲良くしていると思った。

1年間の中国留学を終えたあと陸路ベルギーに渡り、5人前後の事業所で事務補助兼運転手のようなことを半年やった。社長は蘭仏独英の4カ国語が話せた。寝泊まりは社長の家で。夫妻には子がおらず、私は平日に良き社員、週末に良き息子を精一杯演じた。

## 3

1994年の4月に4年生に復学したあと、岡崎眸先生からは外国人労働者への日本語支援について、海野多枝先生からは第二言語習得理論について教わった。そこで、中国帰国者を事例に日本語支援や日本語習得について研究してみようと思いついた——もっともこれは後付

の合理化で「中国東北の雰囲気は懐かしくて」「大学に＜中国帰国者連絡会＞の支部があったから」「同会が運営する＜浜崎日本語教室＞を覗いてみたところ結構たのしかったので」というのが実際のところだ（＜ ＞で括るのは全て仮名）。

私はこの＜浜崎日本語教室＞で留学生のようなエリートとは違う中国東北出身の庶民の方々と何も余計なことを気にせずに親しく話すことができた。これはある意味、中国留学時代に私がやり残してきたことでもあった。中国留学時代はちょっと親しくすると「私が日本に行けるよう手続きしてくれ」と頼まれることが多くうとうとうしかった。もちろん、何でもしてあげる（くれる）のが友達なのだからこれは仕方のないこと。それが嫌なら最初から友達などつくるべきではないのだ。私は＜浜崎日本語教室＞で中国留学の続きを体験することができた。この教室には週2回通った。

当時ときどき書いていた日記を見る限り、1994年4月から1995年3月までの間に私は少なくとも36回この教室に足を運び約6万3千字の記録をつけている。研究に使うつもりでフィールドノーツをつけていたわけではないと言えは嘘になるが、こうした記録を不定期でつけるのは米国留学時代からの習慣だ。

いま読み返してみると年少者に関する記述が多い。「子どもは昼間学校で勉強してるけど大人は夜ここでしか勉強できないから」ということで大人に重点を置いた日本語教室だったが、それでも年少者は教室にやってくる。教室やホールや建物の外で騒いだり、子どもどうしでいがみあったり。とにかく、当時は学生ボランティアが不足していて年少者に対しては「子守」以上のことがあまりできなかった。

1995年4月、私は大阪に転居した。阪大の院試に受かったのだ（東外大の院試は不合格）。阪大を選んだのは当時中国帰国者対象の日本語教育と言えはそこの山田泉先生と田中望先生が有名だったから。もっとも、入学して分かったことだが両氏とも阪大留学生センターの先生であって私が入った言語文化研究科の先生ではなかった。

4

1995年度、私は公立の小中学校（計3校）で初めて「入り込み」というやつを体験した。日本語が分からない児童生徒を別室指導することを「取り出し」と言ったりするが「入り込み」とは当該児童生徒の隣に座って一緒に授業を受けつつ学習補助をすることを指す。

計3校のうち2校については教育委員会からの依頼だった。教育委員会で中国語の通訳登録をしていたところ声がかかったというわけだ（時給制）。また、残りの1校については山田泉先生を経由した学級担任からの支援要請に応じたものだった（無償）。

私は十数年ぶりに小中学校で授業を受け小学校で給食を食べた。そして「大阪には『にんげん』という科目がある」「小学校と中学校では机の匂いが違う」「大阪では英語を読むときも抑揚が大阪弁」「小学生は学校でウンコしたくても我慢してる」ということを「発見」した。

日記を見る限り私はこれら3校に1995年度だけで少なくとも62回足を運び（1回につき授

業3時間程度)約8万8千字の記録をつけた。これはつまり、1年のうち2カ月は小中学校に通って小中学生と一緒に授業を受けていたということだ。

私は当初期待したほどは中国帰国児童生徒が周りの児童生徒と相互交渉する現場を目撃しなかった。これは一つには他ならぬ私が中国帰国児童生徒の話し相手(遊び相手)になってしまうから。要するに私は透明人間になりそこねたわけだ。しかし、それはそれで結構なのしかった。日本の学校の変なところ、中国の学校の様子、昨日クラスで起こったこと、中国での暮らし、日本の印象、家族や親戚のこと、将来のこと…等々。きっと先生は「鍛治さん授業のこと説明してくれてはる」と思っていただろうが、実際に話していたのはそんなことが多かった。しかし、来日間もない児童生徒にとりあえず必要なのは通訳でもなければ日本語教師でもなく、きつこうした「話し相手」だと思っていたので、私は子どもの話をじっと聞き、必要なことについては担任と共有した。

私は黒子のような役どころの人間として休み時間も児童生徒と教室で過ごした。私は教師のように振る舞うことを努めて控えた。そのせいだろう。教師あるいはそれに準じる大人であれば決して出くわさないであろう場面に私は何度も居合わせることができた。楽しい場面もあれば、そうでない場面もあった。最も迷ったのは、いじめ(あるいはそれらしき場面)が目の前で展開したときだ。それとなく介入する場合もあれば傍観する場合もあった。そして「あの日あのとき傍観を選んだのは『ありのままの展開を一部始終観察したい』という残忍な探求心からではなかったか」と今も自問することがある。

## 5

1995年度には特筆すべきことがあと二つあった。一つは<殿岡国際交流協会>が行っている<キッズクラブ>という「日本語教室」のメンバーになれたこと。もう一つは中国帰国者が集住する<宮都地区>に転居したことである。

同協会が中国帰国者の子どもたちのために「日本語ボランティア」を募集していると聞いたのは阪大で同期だった<辻木さん>からだった。彼女は私が中国帰国者について研究しようとしていることを知っていて、そう教えてくれたのだった。私が協会事務局を初めて訪れたのは日記によればどうやら1995年9月のこと。そのときの担当職員とのやりとりは非常に印象深かったので今でも良く覚えている。

まず私は、未だボランティア1年生ですらない未選抜のvolunteer-wanna-beとして<キッズクラブ>の趣旨と活動内容について早口のレクチャーを一通り受けた。私はこのままでは選抜に漏れると直感し「中国に留学してたので中国語が話せる」「大学院で中国帰国者について研究している」と自分を売り込んでみた。が、「語学の練習代にされてもねえ」「研究材料にされても子どもたち可哀想ですし」と速攻で切り替えられてしまった。

——完敗だった。この日、私はボランティア志願者がいつでもどこでも感謝歓迎されるとは限らないという(今になって考えてみれば当たり前の)ことを学んだのだった(なお、後で分かったのは——当時同協会は震災に伴い「大量発生」したボランティアを交通整理する

管制塔のような役割を担っていた。質問紙を配布・回収するなりトンズラした「ボランティア」がかつていた。このボランティア公募には既に相当数が殺到していた——ということだった。

さて、一旦は脈ナシと諦めていた<キッズクラブ>への参加だったと思わぬところでチャンスが訪れた。ある人に誘われて新渡日児童生徒についての研究会に出席したところ偶然にもこの<キッズクラブ>担当職員が同席していたのである。実は私のことを捜していたのだと彼女は言った。もちろん私は喜んで<キッズクラブ>に加わることにした。

6

私が<宮都地区>の存在を知ったのはこれもやはり阪大で同期の<辻木さん>からだった。ここでは土曜の夜に「日本語教室」が開かれており、日本語教師養成講座で彼女と同窓の<藤波さん>がこの教室の運営等に携わっているという。

1995年12月、私は初めてこの教室を訪れた。ちょうどこの日は中国人講師と中国帰国青少年達が何やらトラブルした直後らしく日本人講師が「中国人講師にわびを入れるように」と青少年達を説得している最中だった。青少年達の間には、パンチパーマ、龍の刺繍入りのスカジャン、紫や黄の真新しい鳶職人用作業服上下、ピアス、腰から下げたビニールケース入りの携帯、といったスタイルが見受けられた。青少年達は大声で騒ぎながら教室を出たり入ったりする一方、勢いよく机に腰掛けたり、勉強している小中学生を挑発したりしていた。その日は「取り込み中」だったこともあり、私がどこの誰か尋ねてくる講師はいなかった。教室には講師について静かに勉強している小学生が5～6人。英語をやりたいと言う中学生がいたので私は彼に英語を教えた。

その後、私はこの教室の運営に携わっている<藤波さん>と電話で話す機会があった。「2月に<市民プラザ>で春節の集いをやるので来て下さい」とのことだった。

<市民プラザ>で催された春節の集いには最低でも200人の中国帰国者が出席しているように見えた。太鼓・喇叭・シンバルに合わせた央歌（＝ヤングー。日本の盆踊りに当たるような中国東北の踊り）などは圧巻で「ここは中国か？」と錯覚するほどだった。当時私は建てかえに伴う立ち退きを家主から要請されていたが、どうせ引っ越すならこういう楽しそうな地域にと思い、1996年3月、この<宮都地区>に引っ越した。

7

1996年度は基本的に<殿岡国際交流協会>の<キッズクラブ>を中心に活動したが、私が単なる参与や観察を越えた「行動」というやつを積極的かつ意図的に行ったのはこの<キッズクラブ>においてだった。<キッズクラブ>に参加していたボランティアの間では1995年度末あたりから<キッズクラブ>を「日本語学校の年少者版」として位置づけようとする動き（あるいはそう見られても仕方ない動き）があった。これは具体的には要するに「騒ぐ

人は来るな」「数学や英語を教えてくれと言われても困る」「悩み事のある人はプロのカウンセラーのところへ」「一定期間在籍したら修了（＝卒業）」という提案だった。私はこれに抵抗した。＜キッズクラブ＞担当職員の＜近藤さん＞も私に賛成してくれているようだった。

結局この「日本語学校化計画」は事実上の廃案となった。ただし、一定期間在籍したら修了という部分については受け入れざるを得なかった。ただし、制度を換骨奪胎し、修了したあとも自習目的であればまた来てもよいということにはなった。ただ、今でも残念なのは、こうした方針決定の場に子どもたちの姿が全く見られなかったことであり、この修了式が子どもたちの「えーっ」「嫌や！」にも関わらず実行されてしまったことである。

1996年6月に行われた第1回修了式の直後、職員の＜近藤さん＞から「ボランティアに欠員が出た。誰かいい人いないか」と言われた私は真っ先に山田泉先生を引き入れることを思いついた。山田先生なら「分かってくれる」はずである。山田先生からは「東京では、他に行くところがない中国帰国者の子どもらが集まってドラゴンという暴走族ができた」という興味深い話も聞いていた。私はダメかなと思いつつ電話してみたが、山田先生はあっさりOKしてくれた。後日職員の＜近藤さん＞にこのことを話すと、まさか阪大教授を新人ボランティアとして引っ張ってくるとは予想してなかったらしく非常に驚いていた。

## 8

1996年度は中国帰国生徒のドロップアウトについていろいろ考えた。この年＜浜崎日本語教室＞の＜トシオ＞（＝中国帰国者三世）は学校で同級生に殴打された際ナイフで相手に軽傷を負わせてしまい高校から事実上の退学処分を言い渡されていた。弁護士やボランティアの活躍もあり退学処分は免れたものの今度は彼みずからが「出席日数不足→留年決定→自主退学」という道を歩もうとしていた。私は東京に行くたびに＜浜崎日本語教室＞のボランティアと話し合い、高校を辞めぬよう＜トシオ＞を説得していた。しかし、反応はいまひとつ。困り果てて＜中国帰国者連絡会＞の事務局長に相談したところ「昨日も＜島田さん＞（＝＜浜崎日本語教室＞のボランティア）から電話があつてさ。＜トシオ＞どうしようかって」「じゃ事務所に呼びますよ。＜ナガイヒロシ＞を。そんで＜トシオ＞に会ってちょっと話してもらいますよ。しっかりしろって。私セッティングしますから。鍛冶くん＜トシオ＞に連絡しておいてくれるかな」ということになった。

私はこの＜ナガイヒロシ＞という名を前にも聞いたことがあった。中国帰国青少年が東京で結成したドラゴンと総称される「暴走族」には華魂（チャイニーズドラゴン）や怒羅権（ドラゴン）という老舗の他、黒龍会（ブラックドラゴン）・神龍会など色々あるが＜ナガイヒロシ＞と言えばこうした「暴走族」の初代総長の中で最も有名な2人のうちの1人だ。彼こそが＜トシオ＞の気持ちを最も理解でき＜トシオ＞が最も尊敬するはずの人だった。＜トシオ＞を励ましたり説得したりするのにこれ以上の適役はいないと思われた。

1996年9月、私は＜トシオ＞の他に＜トシオ＞と同じ高校でやはり高校を辞めようとしている中国帰国生＜マッキー＞を伴って＜中国帰国者連絡会＞事務所を訪れた。ボランティア

のく島田さん>も同席した。くヒロシさん>は鉄工所(?)の作業服を着た相棒を1人ともなって現れた。ノータイに紫の背広。年は私と同じくらいだった。事務局長はくヒロシさん>との用件を済ませると彼に私達を紹介してくれた。

彼はくトシオ>とくマッキー>を見て「お前か。人、刺し殺したってのは」「俺が想像していたのはさあ、もっと日本語も上手にしゃべれなくて殻に閉じ込めるタイプだったんだけど。だいぶ違うねえ。お前ら中国人に見えないよ。お前は日本人みたいに見えるし、お前はアメリカ人だよ」と言った(当時くマッキー>は髪型が金髪のタテガミだった)。

くヒロシさん>は「よくケンカ売られて困っている」という訴えには「そんな小さな喧嘩を繰り返してもきりが無い。有名で強い奴に勝たないと。そうすればもうケンカ売ったりしてこないよ」というコメントを、「日本人は信用できない。友達になれない」という訴えには「お前らを虐めてくるのは日本人だけだよ、こうやってお前らを助けてくれるのも日本人なんだぜ」というコメントを返していた。

こんな機会もうないと思った私は前から気になっていたことを一つ質問してみた。「皆さんは集会のとき五星紅旗の他に日章旗や菊紋もよく使用しているようだが皆さんの御両親を苦しめた日本軍国主義を恨んでないのか」。これに対するくヒロシさん>の答えはこうだった。「恨んでなんかいないよ。戦争があったから俺達がいるんじゃないか」。

最後にくトシオ>は「明日、高校の文化祭に来てくれませんか」と申し出た。するとくヒロシさん>は「行かない。[今晚] お前らがく岩谷> [=いつも集会している場所] に来いよ。そして、こいつらみたいになりたくないと思えばもう来なければいいし、気に入ったらまた話をしよう」と返事をし、私に対しては「お茶でも飲みましょう」と言ってくれた。私は最後に『ちゃんと学校行け』ってこの2人に言ってやって下さい」と頼んだのだが、「人を殺しちゃダメだぞ——でも半殺しはいいんだからな」とだけ言い置いてくヒロシさん>は事務所を出て行ってしまった。

私はその晩、誘われるままにドラゴンの「集会」に足を運んだ。くトシオ>らを引き連れて。

くヒロシさん>は私達を出迎えてくれた。駅前のショッピングスクエアにはたくさんの人がいて一体どこからどこまでがドラゴンのメンバーなのか判然としなかったが、最低15人はいたように思う。案内されてくヒロシさん>と同じテーブルにつくと「日本人か?」という中国語が仲間から挙がった。くヒロシさん>は私の中国語がなかなかであることを中国語で仲間に宣伝してくれた。そして「こいつなんか中国人なのに中国語わかんねえんだよ」と言って1人の少年を紹介してくれた。彼はここの4代目の総長。襟足を長く残したパンチパーマだった。

しばらくするとくマッキー>の携帯が鳴った。相手は高校生らしく「タイマンだ」とか「謝れよ」とか言ってきている。くヒロシさん>の友達が携帯をもぎ取って対応する。「これからお前んち行くから」が効いたらしい。相手は最後には「すみません」を連呼していた。

今後また何かあったら連絡を取り合おうという話になり、その晩はそこで失礼することにした。別れ際くヒロシさん>は「将来社長になったら運転手として雇ってよ。用心棒が必要



なら用心棒でもやるし」と大声で冗談を言った後で「普通じゃできないことでも俺達はやれるから。何でも言ってくれ」と耳打ちしてくれた。そして「不送了（＝じゃあここで）！」と中国語にコード・スイッチして私達を威勢よく送り出してくれた。

それからしばらくして＜マッキー＞も＜トシオ＞も高校を自主退学した。私達は弁護士に申し訳ないと思ったが弁護士は「あんな環境の学校では彼が行きたくなるのも無理ない」と＜トシオ＞に同情してくれていた。

＜トシオ＞はその後ドラゴンのメンバーとよく会っているようだった。＜トシオ＞はもうすぐ高校入学というとき「ねえねえ、ドラゴンって知ってる？」と嬉しそうに話しかけてきたことがある。当時憧れに過ぎなかったものは（私達が起こした行動が直接の契機となり）半年後には現実となった。私達は彼の運命を変えたのだろうか。また、変えたとすれば、良い方向へ変えたのだろうか。そして、私がもしも近い将来＜トシオ＞とドラゴンの関わりを題材に論考を発表するとしたならば、私は「ヤラセで論文を書くマッチポンプ野郎」になるのだろうか。

## 9

1996年度、私は＜宮都地区＞の中国帰国青少年達（特に学校的規範から逸脱した男子たち）と夜中によく遊ぶようになった。

1996年10月のある夜、「日本語教室」に顔を出そうとして＜市民プラザ＞に行くと「もうすぐ地域の文化発表会だから、今から外の公園で央歌（＝「扇子行進」）の練習をする」とのこと。私は急いで家からカメラを持って来て写真を撮った。私がカメラを向けると大勢の青少年が私の前に集まった。この「日本語教室」にはそれまで何度か足を運んでいたせい、彼らは私の顔ぐらいは知っているようだった。

小学生から大人まで100名を超える人々（ほとんど中国帰国者）が急に現れ喇叭に合わせて「扇子行進」を始めたものだからたまらない。交番から警官が出てきて「届出もなくこういうことしたらダメ」と言ってきた。たしかに「夜、中国人が公園でうるさい」という苦情は当時頻繁にあったらしい。警官を大声で罵倒する中国帰国者もいて一時騒然としたが「日本語教室」の講師（＝多くが小中学校教員）がうまくその場を収め、ほんの少しだけ央歌の練習ができた。

練習後、大人や小学生は警官の指示通りすぐに解散したが青少年達はそこに留まった。私もしばらくそこに留まることにした。（中国帰国者でない）一般の日本人が私の他に2人いた。2人とも中学を出たばかりという感じの女の子だった。青少年の1人が「これ、俺達[の]先生」と紹介してくれた。彼女らは私が学校の先生かと思って驚いていた。

しばらくのち、誰かの提案で何台かに分乗してカラオケに。総勢20人位いたのだろうか。ソファやテーブルは壁際にどけられ、床に落ちたお絞りは踏みつけられた。本には落書きがなされ、マイクは何度も床に落ちた。帰り際に床に転がるコップを拾っていたら「日本人にやらせとけばいいよ。早く行こうぜ」と止められた。そのあと午前3時半頃、ある大きな

交差点に面したファミレスに駐車して暴走族見物。私達以外にも既に25人位のギャラリーがいた。遠くから爆音が近づいてくたびにダベるのを止めて歩道へ駆け寄り、ガードレールや縁石から身を乗り出す。私達と同行していた日本人の女の子は、交通が途切れる一瞬を狙って道路に飛び降りて行き「きゃー。私をさらってー」と飛び跳ねたかと思うと、すぐさまダッシュで引き返してきた。

世が更けるにつれ私達は次々と車の中で眠りに落ちていった。朦朧とする意識の中で私が最後に見た風景は、明け方の青い光の中、まるで御神輿のような装飾が施されたバイクを無音でゆっくり追尾していくパトカーの赤いランプだった。

青少年達と初めて一緒に遊んだ夜はだいたい以上の通りだった。

しばらくすると私は青少年達の間でちょっとした有名人になっていた。週末の夜く市民プラザ>を通りかかったりすると「段大侠!」「段兄!」等の声がかかった。これは私が彼らと「武術仁侠ドラマごっこ」をした際についたアダ名で、普段は単に「老師(=先生)」「老段(=段さん)」「ダン」と呼ばれることが多かった。なお、私の氏名の中国語読みからは「鍛治・致」ではなく「段・志志」という中国に十分ありうる氏名を連想する者が多い。また、私の中国語に日本人特有のアクセントがないこともあり「小さいころ日本に来た中国人」と間違えられることも多い。勉強を教えている中国帰国生徒に何カ月もしてから「え?先生、日本人?」と言われることは今もよくある。

さて、私はなぜ彼らに「受け入れられた」のだろうか。一つには元々この青少年グループが中学生から妻子もちまで幅広い年齢層で構成されていたということがあるだろう。彼らのうち最年長は私より2歳下だったし私自身も5歳以上若く見られることが多かった。また、中国語が話せるということ以外にも、東京のドラゴンのことを色々知っていた、カラオケに行った際みんなが歌えない中国語の歌が歌えた、小中高と器械体操をしていたので公園の砂場で宙返りができた、等々のせいで「一目おかれた」ということがあったかも知れない。

1997~1999年度、私は彼らと頻繁に遊んだ。夜遊びコースの基本は公園やく市民プラザ>でダベったりトランプをすることだったが、24時間営業の浴場に行ったり、暴走族を見に行ったり、カラオケに行ったりすることもあった。

1997年度の秋頃だったと思う。私は自宅を開放して彼らとよく中国麻雀をした。日頃は食べないカップラーメンもこのときは常備しておいた。これが契機となり青少年達は私の自宅を頻繁に訪れるようになった。

宿泊者も次第に増えていったが、息づかいや立ち振る舞いや生活のペースを他人に合わせるというのはホームステイ時代からの私の特技だったので、さして苦にはならなかった。ただし冬場布団が足りずに困ったことや、何らかの締切に追われているときに寝袋を持って阪大に避難したことは何度かあった。私が唯一彼らにお願いしたことは「ゴミ箱を灰皿にするな」「私の部屋に女の子と来るのはよいがエッチはするな」ということだった(もちろん、この「エッチ禁止令」が私が眠っている間も遵守されていたかは分からない)。

私の部屋で話される議題には猥談・思い出話・噂話・冗談・武勇伝などの混ぜ合わせが多かったが、特に感慨深く聞いたのは彼らの生まれ故郷黒龍江省方正県の最新ニュースだ。

「××にオープンしたダンスホールはお泊まりコース▽▽元（でも〇〇というコは性病もちなので踊るだけにしておいた方がよい）」「△△という美容室で働いている◇◇という女の子の彼氏は児童をはね殺してしまい現在逃亡中」等々。海の向こうの小さな街の出来事は移民というメディアによって数日後には私の部屋に配信されてくるという仕掛だ。

最も頻繁にやってくる<志民><小庫><慶友>の3人は私が当時もっとも親しくしていた友人だった。<志民>は私の家から100メートルと離れていないところに祖母と姉と3人で暮らしていた。彼の家に遊びに行くと「我走了後信箱来東西大事に、好々とおきなさい千万火の用心。ガスは忘れずにとめる[「な」は変体仮名表記]」（私が出かけたあと、郵便受けに来たものは大事にちゃんととおきなさい。くれぐれも火の用心。ガスは忘れずに止める）という書き置きを見かけたりする。彼の祖母は元中国残留婦人で、私と顔を合わせるたびに「<志民>がいつも迷惑ばかりかけて本当にすみませんです」と深々と頭を下げるのだった。

最後に参考までに中国帰国青少年たちの来訪・宿泊の記録を見てみよう。例えば1997年度は、宿泊が6日で延べ15人、来訪が7日で延べ28人。ただしここで6は7の内数であり15は28の内数。以上を1997(6/7,15/28)と表せばそれ以降は1998(11/23,32/100)、1999(6/32,10/75)、2000(0/8,0/14)、2001(0/7,0/15)となる。もちろん記録忘れが相当数(!)あるので以上は最低限の数字である。なお、1997～2001年度の来訪者別来訪頻度は第1位から順に、<志民>40日、<小庫>29日、<慶友>23日だった。

2000年度以降来訪者が減ったのは、一つには一部の青少年が不仲になり私の部屋での鉢合わせを避けたから。もう一つには後述の入管問題等で私が忙しくなり彼らを「遠ざけて」しまったからだろう。

## 10

1998年4月、私は阪大から京大に移った。1997年のある日、私は「日本の学校は『異文化』を押しつぶし排除することを通じて日本社会の秩序を再生産している」という問題意識から「再生産」をキーワードに本を検索しているうちにブルデューの『再生産』に行き当たり、教育社会学という学問があることを初めて知った。青少年達の「夜襲」の合間をぬっての準備は相当つらかったが私はどうにか京大教育学研究科博士後期課程に移ることができた。

## 11

1998年秋、私は他市の中学校で中国帰国生達に日本語を教えることになった。ある教員向けの研修会で中国帰国児童生徒の学校体験について講演したところ同校の<野上先生>から声がかかったのだ。この年この校区の公営住宅では中国帰国者が急増していた。空室100戸について入居者を募集したところ（2DK風呂なしが多かったため一般の日本人からは敬遠され）中国帰国者が大勢入居してきたというのが経緯らしい。時給1000円で毎週1回(1～

4時間目)日本語を教えるというのが私の仕事だった。

この学校での経験を一言で総括すれば「居心地最悪と勤労意欲低下の相乗効果により半年で御役御免」だった。職員室には私にあてがわれた座席がなく4時間目終了後はせいぜい5分ほどく野上先生>と立ち話をして去るというのがパターンだった。ある日、新顔のアシスタントイングリッシュティーチャーが自分専用の席に座ってパンを食べているのを見たときはショックだった。こういう括り方がフェアでないのは分かっているが「英語教育と日本語教育の差」「一般生徒と中国帰国生徒の差」を見せつけられたようで非常に腹が立った。私は「〇〇市には常勤の中国人講師がいる」「日本語指導の必要性は在日年数でなく日本語能力をテストして判断すべき」「もっとこういう制度を活用してみてもどうか」等々、いろいろ提言もしてみたが全く相手にされなかった。それどころか私のこうした行動はなぜか常に悪い方へと解釈されているようだった。「こいつは相手するな」という判断はかなり早い時期にどこかで下されているらしかった。私はいつも「中国帰国生徒のための教育運動に参画させてもらっている」と実感するかわりに「時給1000円で安く利用されている」と感じていた。

私は授業の手を抜いた。<野上先生>と生徒に当たってしまったことも1回ずつあった。そのときの自分は本当に最低だったと思う。

私は同校を去ったあと、実はそもそも<野上先生>こそが居心地の悪い職場で（驚くほど幼稚で程度の低い）嫌がらせを受けつつ孤軍奮闘していた、ということを知った。社会学専攻と言っておきながら私はそういう肝心な人間関係をきちんと見ていなかったというわけだ。

## 12

私が阪大に在籍していた1995～1997年度は在阪中国帰国者の急増期にあたり、<宮都地区>にも中国帰国者経営の雑貨屋や料理屋が4つほどオープンした。しかし、こうした活況も1998年度一杯まで。1998年度以降は新規入国者も途絶え1999年夏以降は偽装日系中国人の摘発が本格化した。「バレル前にこっそり帰国」も含めたくさんの児童生徒が学校現場から姿を消した。私が1998年度に他市で教えていた中学生も「やっぱ帰ったか」から「え？この子もそやったん？」まで、約半数がいなくなった。1999年秋になると入管に収容される児童生徒が目立ったが、複数の団体がこれに異を唱えて行動したことが報道され、2000年以降は大阪入管も子どもを収容しなくなったようだ。

2000年新春、私は予想もしてなかった事例に出くわした。彼は継母が中国残留婦人だった。だが現行入管体制では未婚未成年でない限り継子は日本人の子として入国できない。そこで彼はある故人の名義で入国していたのだが、今回バレて上陸許可が取り消された——そんな事例だった。こうした「半偽装」とも呼ぶべき事例は他にも様々だ。養母が中国残留邦人、実父が中国残留邦人の養子、本物だけど偽名を宛われて入国…等々。

2000～2001年度、私は入管問題に振り回された。当事者の家に行ったり入管に付き添ったり収容所で面会したり。マスコミや弁護士と連絡を取ったり支援者間の意見調整をしたり。

特に辛かったのは2001年夏にある男の子を出頭させたとき。嬰兒にして実の両親と死別した彼は、実姉を養母、二世（＝中国残留邦人と中国人の間の子）を養父として育った。ところが現行制度では二世に養育された養子は6歳以上だと定住者ビザで入国できない。当時16歳になっていた彼はやむなく養父を実父と「偽って」入国。それが偽装と見なされた事例だ。在宅で調査してもらえんと思って連れて行っただけでなく収容。私は彼と彼の家族を騙し彼の身柄を入管にプレゼントしたも同然だった。毎週ガラス越しに面会するたびに「なぜ彼がこんな目に遭わなければならないのか」と考えずにはいられなかった。

そのうち私は入管による退去強制こそが日本における外国人排除の最たるものであるとの印象を持つに至った。入管に比べたら学校が行う排除などカワイイものだ。手錠をかけて海の向こうへ追放するわけではないのだから。

この「偽装日系中国人問題」では支援者の一人ひとりが「誰のための運動か」について厳しく問われた。例えばマスコミを通じた世論への働きかけ方をめぐっては「子どもの権利条約か戦後処理か」「児童の涙か老人（＝元中国残留邦人）の涙か」「学習権か家族統合か」という具合にだ。「子どもが全体の共通項なんだから子どもの権利で行こう」と主張する者もいたが実はそうでもない。子どもが世帯に含まれていない事例もあるし、それに、子どもで括られてしまうと「日本人の養子・継子世帯」が「単なる偽装世帯」と差異化できなくなってしまう。また、例えば入管との関係のあり方をめぐっては「全ての外国人のため」とか「全ての中国帰国者のため」とかいう立場を一時留保すべきかが問われた。実際この問題を調査していくと外国人が外国人を（中国帰国者が中国帰国者を）喰い物にしている事例が多く、ある人が実は被害者であること（悪質でないこと）を入管で証明するためにはある人が加害者（悪質）であることを証明しなくてはならない。現実には全員同時救済が困難である以上「当面誰は救い誰は切り捨てるか」について私達は方針を立てねばならなかった（→これも一種の選抜か？）。

だが、たとえ立場は違っても、そうした立場を超えた共同戦線が、大筋では可能であると私は信じていたし、また必要であるとも思っていた。そこで、私は支援者間に分け入りいくつかの介入を継続して行ってみたのだが、期待した効果が得られることはついになかった。

見てて最も悲しかったのは「彼は嫌い。だから一緒にやれない」的な実に「しょーもない」話題が会合で云々されるときだ。さらに「お前はどっちに付くのか」「どっち派か」という踏み絵まで景品で付いてくるのだからたまらない。「何のために」「誰のために」という議論をすっ飛ばして党派もヘチマもないものだ。すると私は「これは非常に大事な問題だ」「これはしょーもないことではない」「ごまかすな」と怒鳴られてしまった。

これはいろんな勉強会や研究会に参加しててもそうなのだが「何のために」「誰のために」がさっぱり見えてこない会合に私はあまり足が向かない。出席してても「つまんない」のだ。

と支援者との関係を例に)言及してみたい。

ごく最近まで私にとって新聞記者とは「下準備なしでやって来て、私が苦勞して揃えた情報を書き写すと、それきりどこかへ消えるタダ乗りの名人」だった。しかし、今回入管問題に関わってみて決してそうではない記者とも出会うことができた。彼は何かあると毎回現場に来てくれ、時には自前のデータを提供してくれ、気が付くと紙面で運動をさりげなく後押ししてくれている。このような「使える」記者は情報リリース先として最優遇しても良いくらいだ。一方、さらに驚くことに「新聞記者の効果的利用法」についてレクチャーしてくれる(非常にノリのよい)記者もいたりする。なんでも彼の話だと、日程を上手に睨みながら「これは未だおたくにしか流してない」との印象を持たせつつ複数の記者に働きかけると、各社同時に「パーンと」大きく載ることがあるらしい。

入管問題に関わりだしてから様々な取材を受け「インフォーマント」的な役どころの人間として調べられる側に身を置いてみて初めて分かったことがいくつもある。取材されることをあれだけ嫌がっていた私が、記者をあれだけ馬鹿にしていた私が、今は記者との間の「与える→貰う→与える」「使う→使われる→使う」という連鎖の中にいる。フィールドワークにおいても、やはり大切なのは「この人達から何が引き出せるのか」ということだけでなく「この人達のために何ができるのか」について真剣に考えることなのだと思う。

附記：本稿は財団法人トヨタ財団の研究助成によります。なお、本稿は様々なボランティア活動を休止することにより捻出した時間を費やして書かれています。つまり、中国帰国者の皆さん等から頻繁にかかってくる支援要請の電話を次から次へと断り「困っている友人を(たとえ一時的にはあるにせよ)切り捨てて見殺しにする」という冷酷さの基礎の上に書かれています。このかん力になれず迷惑をかけてしまった全ての人々に謝罪します。また、これまで私と付き合い私を育ててくれた全ての人々に感謝します。